

「共生の森・東松島」

クロマツ3千本植える

2日間、112人参加

日遊協は5月13、14日、緑のきずな再生事業「日遊協共生の森・東松島」として、宮城県東松島市の2地区で計3000本のクロマツを植えた。内訳は同市浜市地区(0・49ヘクタール)で2200本、

立ち枯れが多く見られる昨年の植林現場・矢本地区(0・63ヘクタール)で補植800本となっている。

参加者は2日間延べ112人。谷口久徳副会長(東北支部長)、知念安光理事(社会貢献・環境対策委員会担当理事)、社会貢献・環境対策委員会メンバー14人、東京都・関東支部ボランティア隊22人、東北支部同29人、北海道支部同5人、植林指導の埼玉森林サポータークラブ5人、それに事務局となっている。両日とも晴天に恵まれた。13日は、浜市地区で翌日の植林の下準備作業を行うとともに、矢本地区で補植を行った。

バスなどに分乗して浜市地区の現場に集合した。午前11時過ぎに開会式が行われ、谷口副会長、知念理事らがあいさつした。

「正宗公からの伝統を」

谷口副会長は「今から500年前、仙台藩主伊達正宗公が海からの災害防止に取り組んできた防災林を、われわれの手で今一度、将来のために再生させていこうと思います」と述べた。

その後、7班に分かれて植林がスタート。参加者たちはめいめいで植樹位置を墨出し(石灰でマーク)し、苗木を置く。スコップやシヤベルで植樹位置を中心に40cm四方、深さ約20cmの穴を掘る。苗木の根を広げて植え、周りから土をかぶせて苗木を軽く上下に揺すり、足で踏んで空気を抜く。苗木を中心に周りの土を盛り上げ、マウンド式にする。埼玉森林サポーターたちが忙しく見回ってコーチして



植林する役員たち。左から知念理事、薛社会貢献・環境対策委員長、谷口副会長▶



植林開始前に全員集合

いた。作業は昼食をはさんで順調に進み、午後3時半過ぎに終了、同5時ごろ仙台駅で解散した。一部のメンバーは矢本地区に戻り、補植を完了させた。

4回計で7617本

これは東日本大震災の津波で被災した海岸防災林を再生させる林野庁の「『みどりのきずな』再生プ

ロジェクト」に日遊協として応じた植林事業。今回の浜市地区の植林対象面積は全体で4・87ヘクタールあり、林野庁は「社会貢献の森」と名付けている。日遊協を含めた9つの団体・企業・NPOが同庁と協定を結んで植林する。現地では広々とした平地に材木で組んだ柵が立てられて、各団体・企業・NPOの植林場所を区分していた。東日本大震災での海岸防災林の被災は青森県から千葉県にかけて約140kmとされている。林野庁は13年に「『みどりのきずな』再生プロジェクト」として植林を計画、団体・企業・NPOに活動参加を呼びかけた。日遊協は08年から埼玉県嵐山町で進めている里山造成10年計画「共生の森」が植林過程を終えて整備期間に入ったことから、新たに同プロジェクトに応じた。

日遊協の参加は、2013年5月の仙台市若林区荒浜地区0・16ヘクタール(クロマツ770本、ヤマザクラ70本)、14年5月の名取市下増田地区0・17ヘクタール(クロマツ777本)、15年6月の東松島市矢本地区0・63ヘクタール(同3000本)に続く第4弾の植林で計7617本となった。